

連載第 14 回

邪馬台国の時代⑨
～奴国から不弥国へ～

河村哲夫

【これまで季刊「古代史ネット」に連載された河村哲夫氏の論文】

季刊「古代史ネット」	連載回数	テーマ
創刊号(2020年12月)	連載第1回【プロローグ】	【Ⅰ】卑弥呼の鏡 【Ⅱ】天照大神の鏡
第2号(2021年3月)	連載第2回【奴国の時代①】	【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々
第3号(2021年6月)	連載第3回【奴国の時代②】	朝鮮半島南部の倭人の痕跡
	連載第4回【奴国の時代③】	北部九州のクニグニ
第4号(2021年9月)	連載第5回【奴国の時代④】	奴国の神々
第5号(2021年12月)	連載第6回【邪馬台国の時代①】	卑弥呼の登場
第6号(2022年3月)	連載第7回【邪馬台国の時代②】	卑弥呼の外交①
第7号(2022年6月)	連載第8回【邪馬台国の時代③】	卑弥呼の外交②
第8号(2022年9月)	連載第9回【邪馬台国の時代④】	邪馬台国への道・三韓諸国
	連載第10回【邪馬台国の時代⑤】	邪馬台国への道・対馬と壱岐
第9号(2022年12月)	連載第11回【邪馬台国の時代⑥】	末盧国と西海の島々
	連載第12回【邪馬台国の時代⑦】	末盧国から伊都国へ
第10号(2023年3月)	連載第13回【邪馬台国の時代⑧】	伊都国から奴国へ
第11号(2023年6月) 【本号】 4 論文一挙掲載！！	連載第14回【邪馬台国の時代⑨】	奴国から不弥国へ
	連載第15回【邪馬台国の時代⑩】	夜須をゆく
	連載第16回【邪馬台国の時代⑪】	朝倉をゆく
	連載第17回【邪馬台国の時代⑫】	日田をゆく

不弥国の所在地

前号においては、奴国について述べた。今回は、不弥(ふみ)国である。

『魏志倭人伝』には、

「(奴国から)東に行きて不弥国に至る。百里なり。官を多模(たま)といい、副を卑奴母離(ひなもり)という。千余家あり」

と書かれている。

多模(たま)は、「魂(たま)」あるいは「玉(たま)」であろう。古代人は、光り輝く玉のなかに超自然の霊力を感じていたのであろう。

すでに何度か述べたように、卑奴母離(ひなもり)を「夷守」と解するのはおそらく間違いで、「日守(ひなもり)」が正しいとみている。

そして、これまで述べてきた倭人伝のクニグニ——末盧国は唐津市を中心とした松浦郡、伊都国は糸島市の内陸側の怡土郡、奴国は那珂川・御笠川流域を中心とした福岡平野とみることにについては、近畿説、九州説論者のいずれにおいても、ほぼ共通の認識といえよう。

ところが、不弥国の位置とその拠点的な地域については、かなり意見が分かれている。

福岡平野にあった奴国からはるかに離れた北九州市説や豊前行橋市説、築上郡築上町説などは論外として、不弥国につづいて記される『魏志倭人伝』の「水行 20 日」や「水行 10 日陸行 1 月」の解釈をめぐる近畿説と九州説の対立の予兆を告げるかのように、説が分かれはじめる。

それでも大きく分けると、不弥国の位置を内陸部とみる説と、沿岸部とみる説に区分できよう。

【内陸部】

- ① 糟屋郡宇美町説(新井白石、本居宣長、吉田東伍、内藤胡南など)
- ② 大宰府付近説(白鳥庫吉、宝賀寿男、楠原佑介など)
- ③ 穂波説(菅政友、久米邦武など)

【沿岸部】

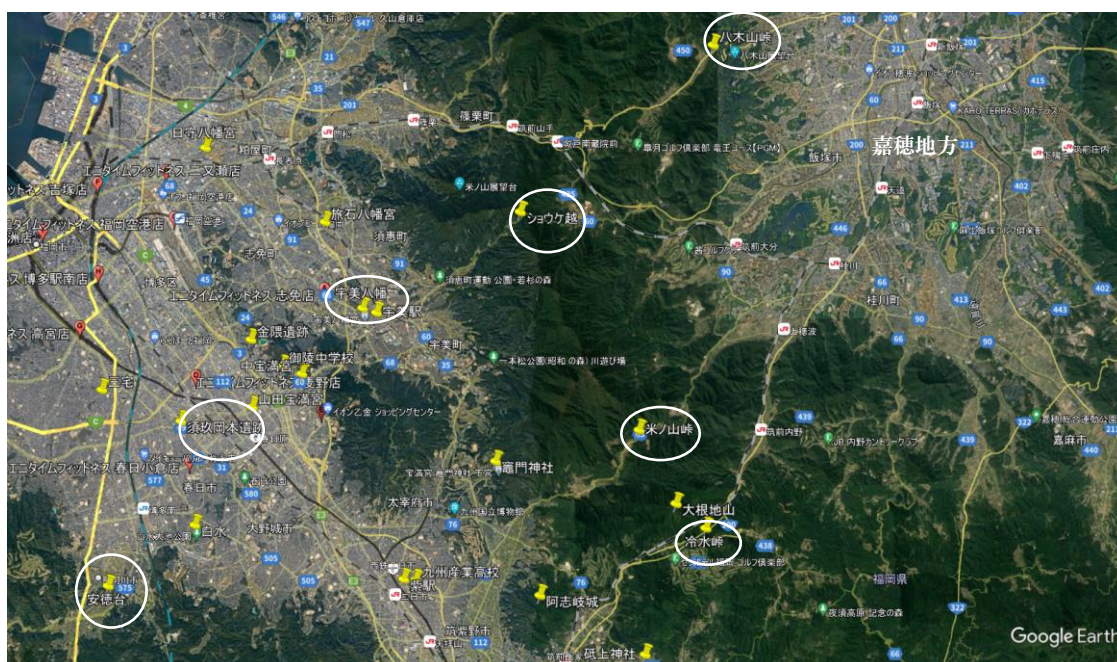
- ① 志賀島説(田中卓など)
- ② 津屋崎説(笠井新也など)
- ③ 福岡市箱崎説
- ④ 糟屋郡新宮町説

最近では、飯塚市歴史資料館館長の嶋田光一氏はじめ、考古学の分野から立岩遺跡群が所在する飯塚市(旧穂波郡)を推す声が強まっているように感じる。

しかしながら、奴国の所在する福岡平野からいえば、嘉穂地方(嘉麻郡と穂波郡)とは三郡山地にさえぎられている。

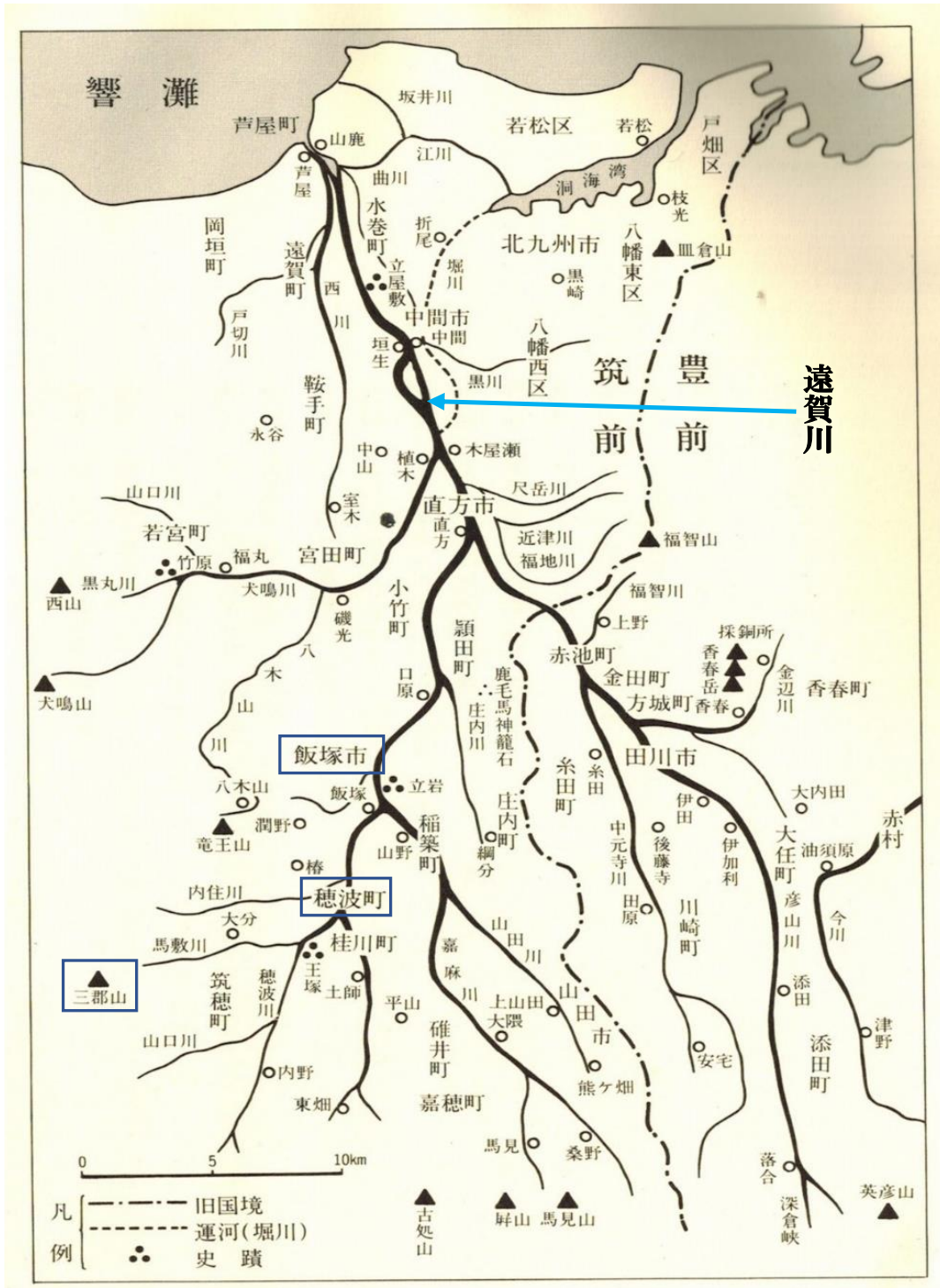
福岡・宇美方面から嘉穂地方に入るには、八木山峠(227 メートル)・ショウケ越(500 メートル)・米ノ山峠(350 メートル)などの険しい山道を越えなければならない。

南部の朝倉地方とも、古処山や馬見山などの山々によって隔てられ、冷水峠(285 メートル)や八丁越(520 メートル)、あるいは嘉麻峠(500 メートル)などの険しい坂道を越えなければならない。



嘉穂地方は、福岡方面から陸路で中国の使者を案内すべき土地としては、地政学的にそもそも不適格なのである。

しかも、飯塚市に到着した後、どこへ向かうというのであろうか。まさか遠賀川を下り、響灘あるいは洞海湾に出て、関門海峡から瀬戸内海に出て近畿に向かうのではあるまい。



近畿に向かうのであれば、何も糸島に船を泊める必要はない。険しい山道を越えて嘉麻地方を

通る必要もない。直接瀬戸内海へ出て、大阪湾あたりまで船で直行すれば足りる。

江戸時代の新井白石や本居宣長などは、不弥国の所在地を糟屋郡の宇美に比定したが、この説が最も常識的で妥当な結論であろう。

【理由①】不弥と宇美は発音がよく似ている。

不弥国(fu-mi) = 宇美(u-mi) ≠ 穂波(ho-na-mi)

穂波(飯塚)説は、不弥(fu-mi)と穂波(ho-na-mi)の発音がよく似ているということが根拠の一つとされているようであるが、宇美(u-mi)のほうがはるかに不弥(fu-mi)に近いことは明らかである。「ho-na-mi」の「na」の異質性を無視することは許されない。

「稲穂が波打つようだ」という神功皇后の言葉から穂波という地名が生まれたという伝承も残されている。

【理由②】宇美と穂波は奴国の東方にあるが、距離的にも地勢的にも宇美の方がふさわしい。

伊都国から奴国まで東南へ 100 里	奴国から不弥国まで東へ 100 里	
平原遺跡から安徳台まで 20.5 km	安徳台から宇美まで 14 km	安徳台から飯塚(立岩)まで 30 km
平原遺跡から須玖岡本まで 23 km	須玖岡本から宇美まで 7 km	須玖岡本飯塚(立岩)まで 27 km

奴国から飯塚(立岩)までの 30 kmあるいは 27 kmはあくまで直線距離で、曲がりくねった山道や高低差をまったく考慮していない数値である。ついでながら、伊都国からの距離のバランスからいえば、須玖岡本説よりも安徳台説のほうが有利である。

【理由③】糸島に船を停泊し、陸路福岡平野から山越えて飯塚に行く理由がまったく説明できない(前述のとおり)。

宇美の古代文献上の位置づけ

宇美(糟屋郡宇美町)が日本の古代文献にはじめて登場するのは、神功皇后に関連した『古事記』『日本書紀』などの記事である。

(1)『日本書紀』神功皇后紀

神功皇后は十二月十四日に誉田天皇(ほむたのすめらみこと)すなわち応神天皇を筑紫で産んだとしている。それゆえに、時の人はその産んだ所を宇瀨(うみ)と名づけたという。

(2)『古事記』

「筑紫の国にお渡りになって、その御子をお生みあそばされたところを宇美と名づけました」

(3)『筑前国風土記』逸文

「凱旋なされた日に、芋湄野(うみの)まで来られたとき太子がお生まれになった。こういうわけで芋湄野という。(お産のことを芋湄(うみ)というのは、土地の人の言葉である)」

(4)『日本書紀』応神天皇紀

「誉田天皇は仲哀天皇の第四子である。母を氣長足姫尊(神功皇后)という。天皇は神功皇后が新羅を討たれた年、仲哀九年十二月、筑紫の蚊田(かた)でお生まれになった。幼少から聡明で、物事を深く遠くまで見通された。立ち居振舞に不思議にも聖帝のきざしがあつた。皇太后の摂政三年に立って皇太子となられた」

当用漢字のなかった時代であるため、宇美のほか、宇瀨、芋瀨なども表記されている。

くわえて、『日本書紀』応神天皇紀には「蚊田(かだ)」という別名であったことが記されている。

朝鮮から帰還した神功皇后は香椎宮(福岡市東区)からあえて宇美に移動し、のちの応神天皇を出産した。そして、その宇美の地は「蚊田(かだ)」とも呼ばれていたというのである。

以下述べることは、『古事記』や『日本書紀』にも記されず、一般にはほとんど知られていない伝承であるが、紹介しよう。

実は、『鞍手郡誌』(鞍手郡教育會・昭和9年)や『福岡県神社誌』(大日本神祇会福岡県支部・昭和19年)など地元の伝承・社伝などによれば、日向から近畿東遷の途上、神武天皇がこの地を訪れたとされている。

『古事記』『日本書紀』では、日向(宮崎)→宇佐→岡水門(遠賀川河口)から、関門海峡を越えて瀬戸内海を経て近畿に向かったとされているが、北部九州各地の伝承によれば、豊前の行橋市あたりから九州に上陸し、内陸部の田川郡や嘉穂郡を通過し、さらには米ノ山峠方面から宝満山の麓の大野邑(大野城市)に入り、田中の庄において、村長の荒木武彦の出迎えを受けたのち、筑紫郡の諸豪族を鎮撫し、その後荒木武彦の案内で、宇美に進み、赤間方面から遠賀川河口の岡水門に向かったという。

宇美の地にしばらく滞在した神武天皇は、その地において荒木武彦の娘との間に皇子を儲けたという。その皇子の名が蚊田皇子であったとも伝わる。『日本書紀』応神天皇紀の「蚊田」は、蚊田皇子に関係していたわけである。

このことにより、宇美八幡宮の神官は代々荒木武彦および蚊田皇子の末裔とされ、神武天皇にあやかって、「神武(こうたけ)」姓を名乗ったという。宇美の地には、荒木や神武原(じんむばる)(糟屋郡宇美町宇美大字神武原)などの地名も残されている。

もちろん、これらの伝承の精度については検討の余地があろうが、地元に残された伝承であることはまちがいない。地域伝承もまた、古代史解明の重要な手がかりと考えている。あえて蚊田皇子に関する伝承を記したのも、次世代への継承という意図に発していることをどうかお察しいただきたい。

それはともかくとして、神武天皇が滞在し、神功皇后が出産した場所が宇美八幡宮の地である。

神功皇后は神武天皇の皇子・蚊田皇子が生まれた由緒ある場所と知って、その宇美において応神天皇を出産したわけである。このことによって、宇美は日本語の「産み」の由来となった。

不弥国の中心地

先述したように、不弥国は宇美という地名で残存している。しかも、宇美川が流れている。

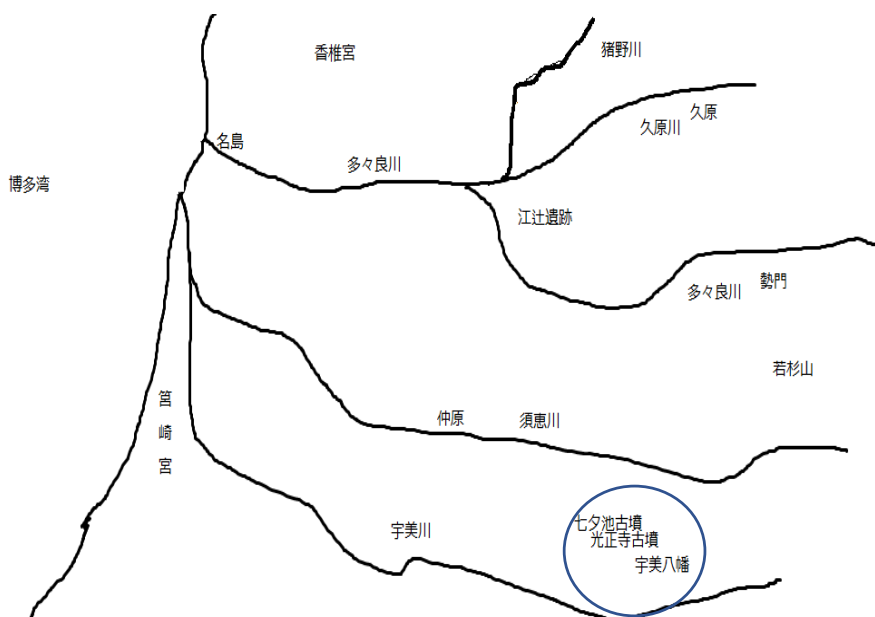
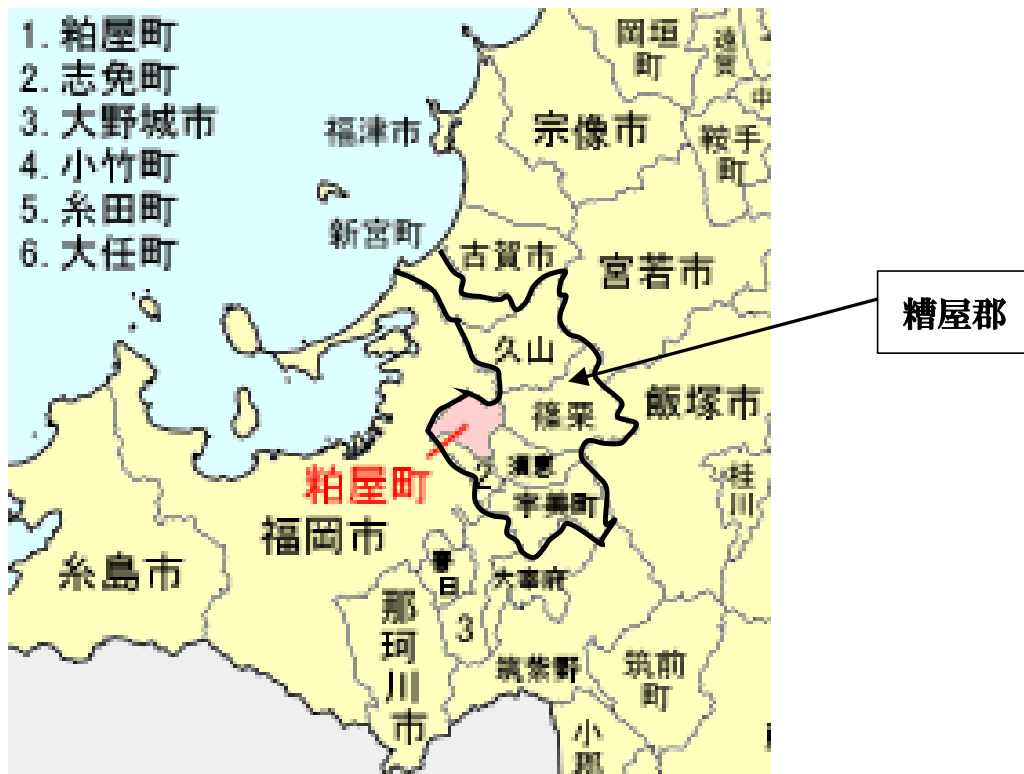
川の名に残る古い国名としては、末盧国＝松浦川、奴国＝那珂川があるが、不弥国＝宇美川も加えてよろしかろう。

したがって、本来は糟屋郡ではなくて不弥郡であるべきであろうが、香椎宮の神領が多かったために、香椎郡→糟屋郡となったのであろう。

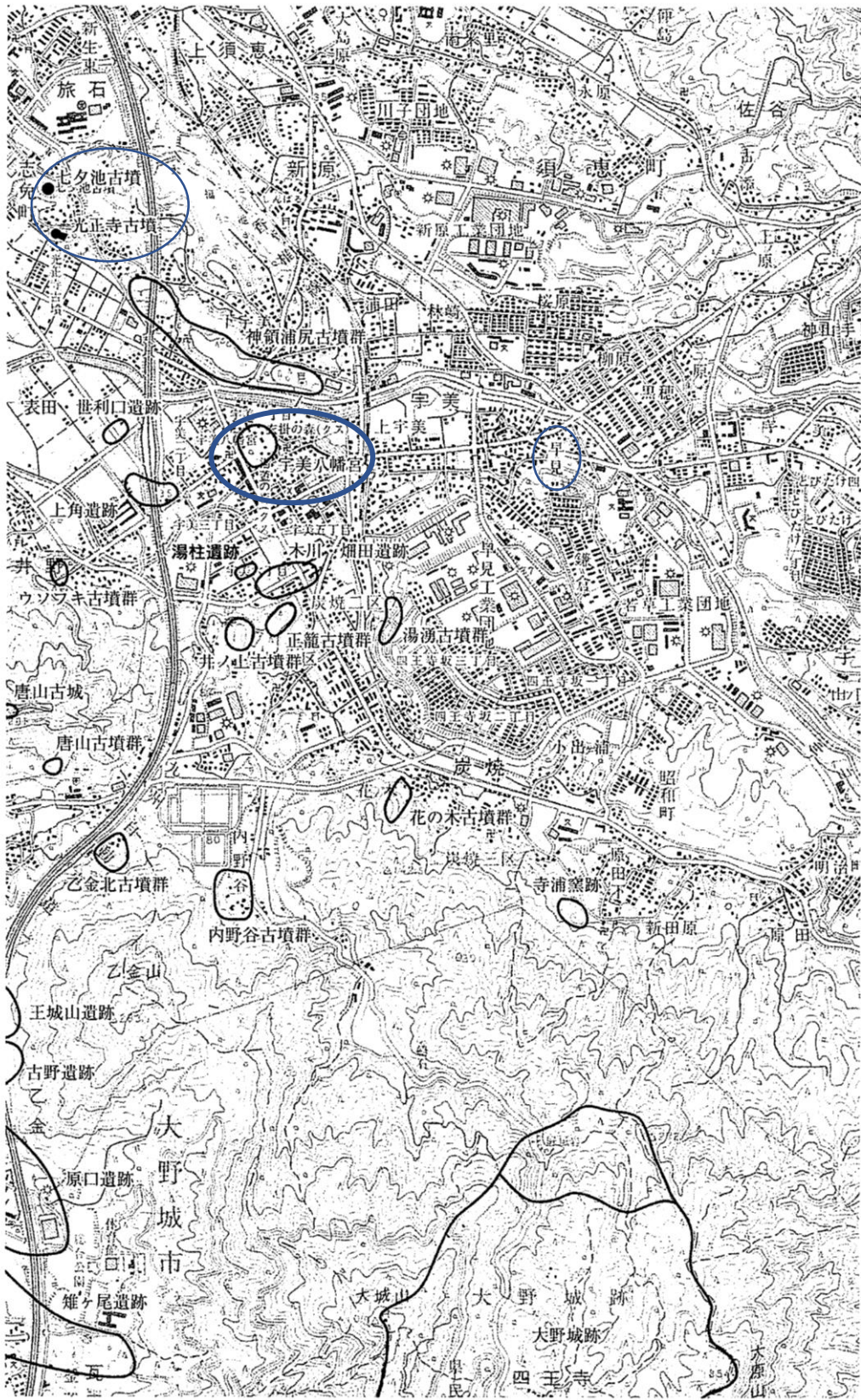
不弥国→糟屋郡には、多々良川、須恵川、宇美川などの河川が流れており、玄界灘にも面し

ているため、山の幸、里の幸、海の幸に恵まれた地域である。

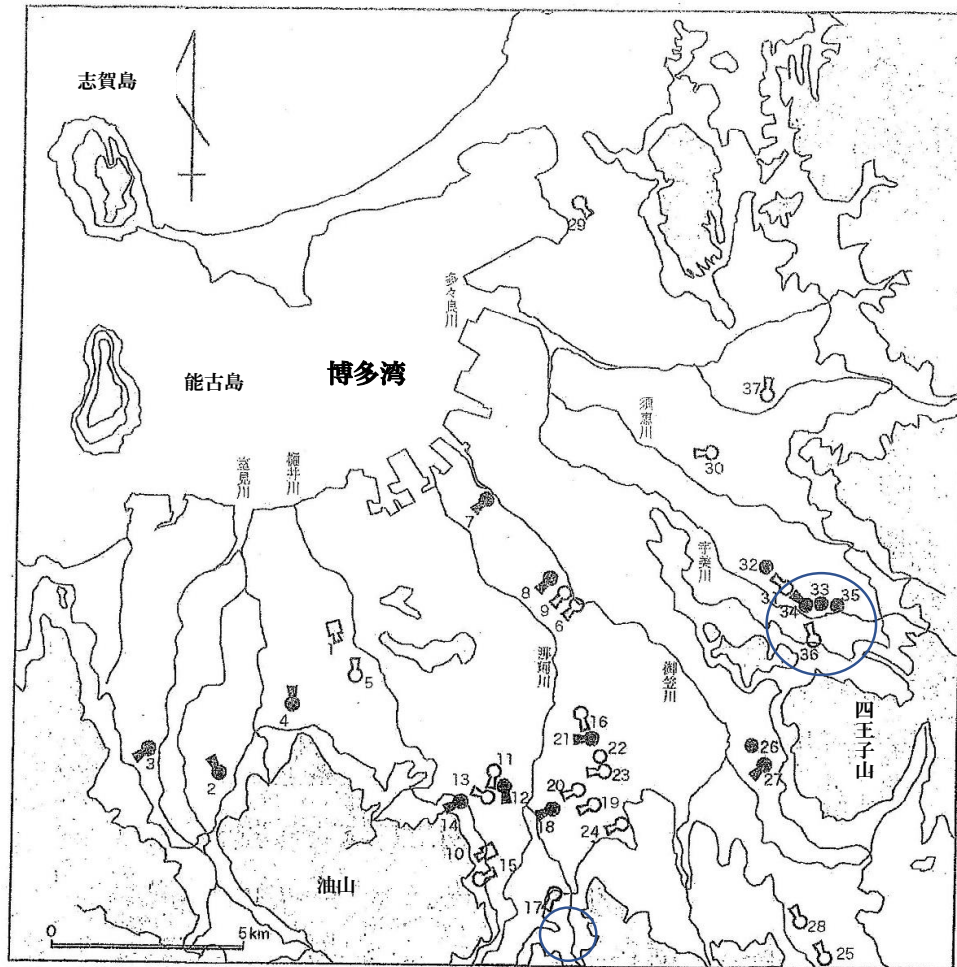
不弥国の拠点については、「奴国の東 100 里」という記事や遺跡の分布状況、ならびに神武天皇や神功皇后伝承などを総合的に勘案して、宇美八幡宮あたりが有力ではないかとみている。



糟屋郡の河川



第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



1. 京隈 2. 押塚 3. 吉武S1号 4. 梅林 5. 神松寺御陵 6. 那珂八幡 7. 博多1号 8. 御塚北 9. 唐光寺御塚 10. 妙法寺2号 11. 期内屋 12. 老司 13. 浦ノ田1号 14. 小丸1号 15. 大方寺前 16. 須玖御陵 17. 安德大塚 18. 貝徳寺 19. 日禪塚 20. 下白水大塚 21. 野瀬1号塚 22. 赤井手 23. 竹々木 24. 上白水雲梯山 25. 那珂 26. 蓮塚 27. 成屋形 28. 御塚1号 29. 名島 30. 戸原玉塚 31. 元正寺 32. 七夕池 33. 神領2号 34. 浦原3号 35. 神領1号 36. 正領3号 37. 真鏡寺

早良平野・福岡平野・糟屋平野の首長墓の分布（黒塗りは中期古墳）

重藤輝行・宮田浩之、2007「地域編年考察『筑前・筑後』」

『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会

【コラム①】宇美八幡宮について

宇美八幡宮(糟屋郡宇美町宇美 1-1-1)について少しばかり紹介しておこう。

祭神は、応神天皇、神功皇后、玉依姫、住吉三神、イザナギである。

境内には、神功皇后出産に関わる伝承が数多く残されている。

①子安の木=槐(えんじゅ)の木

神功皇后は槐の木の枝を折って、その枝に取りすがって無事出産することができたため、出産後その枝を逆さにして地に植えたところ、それがやがて大木に成長したという。

・『愚管抄』にも「神功皇后、うみの宮の槐に取りすがりて、太子をば生み奉りたまふ」と書かれている。

・『八幡本紀』にも、「御産のとき取りすがらせたまひし槐の枝は、やがて根ざして大木となったという。その後たびたび植え替えたが、その元の場所にその種子を絶やすことなく今に至っている。いにしへは宇美の宮の槐といって、皇后皇女をはじめ、安産のお祈りの際の御衣木には、必ずこの槐を用いられたという。されば、安産の木として、安木と呼ばれた」とある。



②産湯(うぶゆ)の井戸

神功皇后が出産後産湯に用いた井戸である。妊娠した女性がこの井戸の水を持ち帰って飲めば、安産であるという。「湯蓋(ゆふた)の森」は約 14 メートルの大楠であるが、神功皇后出産の折、東南の高い山(宝満山)に「益影の井」と呼ばれる霊水があり、その水を汲んできて産湯の水としたという。

③湯蓋の森

御産所の側に楠があり、その楠の枝が湯舟の蓋(ふた)のように垂れていた。神功皇后はその大楠の下で産湯を用いた。その後楠が大木に成長し、枝葉がことに美しく繁茂したため、後世の人はこれを「湯蓋の森」と呼ぶようになった『太宰管内志』。

④衣掛の森

約 20 メートルの大楠であるが、神功皇后が産衣をこの木の枝に掛けたという。

⑤胞衣が浦

胎児を包んでいた胎盤、すなわち胞衣を御産所の後ろの川ですすいだところ、川の魚が胞衣(えな)の血を呑んだ。このため、この川の鮠(はや)、すなわち赤魚(赤魚)はことさら赤いという。

胞衣は御産所の後ろの、境内から北へ二町(約 200 メートル)の神苑内の山中に納められたが、その場所を「胞衣(えな)が浦」と呼んだという(『太宰管内志』)。

⑥逆杉

神功皇后が昼食の箸に用いた杉の枝を逆さに植えたところ、成長したものであるという。

⑦高麗橋

以前、神社の側に放生池があり、石の橋が二つ架けられ、高麗橋と呼ばれていた。神功皇后が朝鮮から船に乗せて持ち帰ったものであるという。

⑧境内末社

境内末社として神功皇后を祭神とする聖母宮、武内宿禰を祭神とする武内社、湯方殿を祭神とする湯方社などが祀られている。

湯方殿とは、神功皇后の出産に立ち会い、無事に応神天皇を取り上げた産婆役の女性であった。その大役のゆえに、神として祭られることになったのである。

⑨安産祈願の神社——小安石

宇美八幡宮は、神功皇后の故事にちなみ、現在でも安産祈願の神社として有名である。境内にある湯方神社には生まれた子の氏名と生年月日などを書いた無数の子安石が奉納されており、出産前に妊婦がその石を一個持ち帰り、出産後に一個の石を添えて返納するならわしがある。また、子安石を手を持って妊娠した子の男女を占う風習もある。

糟屋郡の古代遺跡

糟屋郡も唐津市の菜畑遺跡や糸島市の曲り田遺跡、福岡市の板付遺跡などおなじく、初期の水田稲作農業が伝来した地域である。

糟屋郡の弥生遺跡の状況などについて、若干紹介しておこう。

多々良川流域

(1)江辻遺跡

日本最古級の環濠集落遺跡である。住居はすべて朝鮮系の松菊里型住居とされる。石包丁石斧、朝鮮系柳葉形磨製石鏃(墓に副葬)、木棺墓。

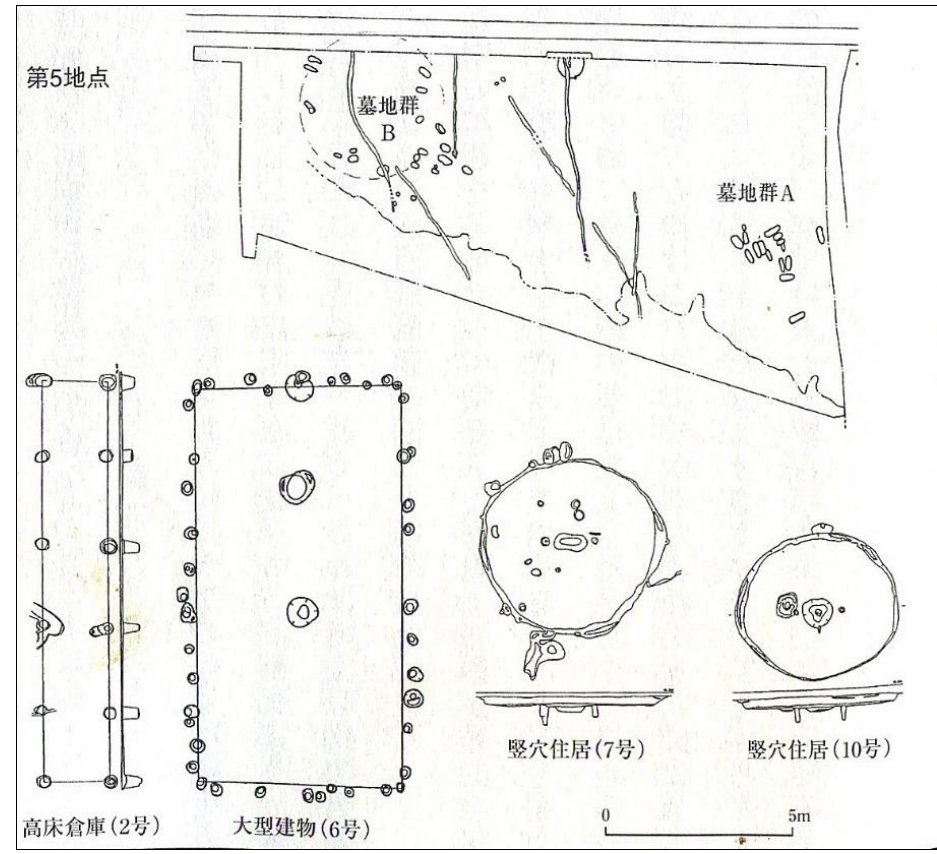
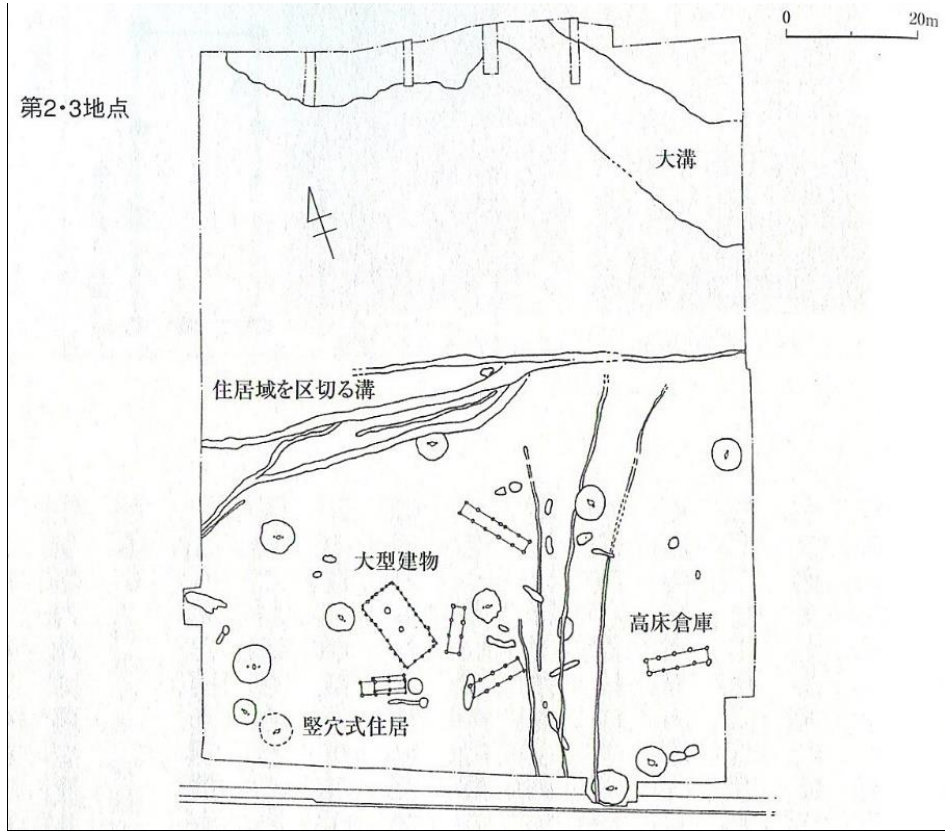
なお、江辻区に所在する江辻遺跡群は過去 20 年の調査で計 9 か所の遺跡が確認されている。



【コラム②】松菊里型住居とは



円形の竪穴住居の中央に大きな穴があり、両側に 2 つの小さな柱穴が設けられている。韓国忠清南道の松菊里(ソングンリ)遺跡で発見された住居を標識とすることから、「松菊里型住居」と呼ばれている。朝鮮半島から北部九州へ伝わり、その後東日本へも伝播したといわれる。



(2)多々良川流域の青銅器鑄型

・福岡市東区八田

中細形銅戈鑄型と中広形銅劍鑄型

・福岡市東区多田羅

銅釧鑄型と中広形銅劍鑄型

(3)多々良川流域の邪馬台国時代の遺跡——弥生時代終末期(2世紀末～3世紀前半)

・上大隈平塚墳丘墓(糟屋郡粕屋町上大隈)

巨大な蓋石を使った箱式石棺墓。「宜子孫」銘内行花文鏡片と菅玉 17 点が出土。墳丘の規模は径 17 メートル、高さ 1.5 メートル。

・酒殿遺跡石棺墓(糟屋郡粕屋町上大隈)

小型内行花文仿製鏡や舶載の獣首鏡、小玉、管玉などが出土。

(4)戸原王塚古墳(糟屋郡粕屋町戸原王塚)

・帆立貝式の前方後円墳(円墳に方形の造り出しがついたもの)

墳丘は後円部に比べ前方部の長さが短くまた前方部の高さが後円部に比べ著しく低い帆立貝のようになっていることから帆立貝式の前方後円墳に属する。

・規模等

墳丘の規模は、後円部の径 28～31 メートル、高さ 3.5 メートルで、前方部の最大幅は 14 メートル、高さ 1.5 メートルを測り、墳丘全長は 45 メートル。糟屋地区最古の古墳といわれるが、資料不足のため築造時期は不明。後期末までには築造されていたと推測される。

宇美川流域

(1)光正寺古墳(糟屋郡宇美町光正寺3-4537)

墳丘規模は全長約 54 メートル、後円部径約 34 メートル、前方部長 20 メートルで、前方部 2 段築成、後円部 3 段築成の糟屋郡最大の前方後円墳である。標高 46 メートル前後の東西方向に延びる丘陵上に築かれ、2 段目テラスが作り出されている。2 段目のテラスより上位に盛り土を行い、墳丘周囲には 2 段目以上で葺石が施されている。

築造年代は、第 1 主体部から出土した古式の土師器(甕)の製作年代が 3 世紀中ごろから後半とみられているが、前方部の発達状況からみて、4 世紀初頭の古墳で、被葬者は糟屋地域の有力豪族とみられているが、宇美八幡に近い位置にあることから、神武天皇の皇子とされる蚊田皇子およびその末裔一族の可能性が高い。



後円部墳頂部に築造された5基の主体部は、弥生時代の墳丘墓を想起させる箱式石棺やカメ棺を用いるなど特異な埋葬方法である。箱式石棺を多く用い、弥生時代後期的な主体部を有している。

後円部中央に第1主体部があり大型の箱式石棺がある。この箱式石棺は博多湾の能古島産とみられる川原石で囲まれていた。墓壙の規模は長軸で約6メートル、幅約4メートルで、箱式石棺の石材は、安山岩の板石や緑色片岩、滑石などが使用されている。

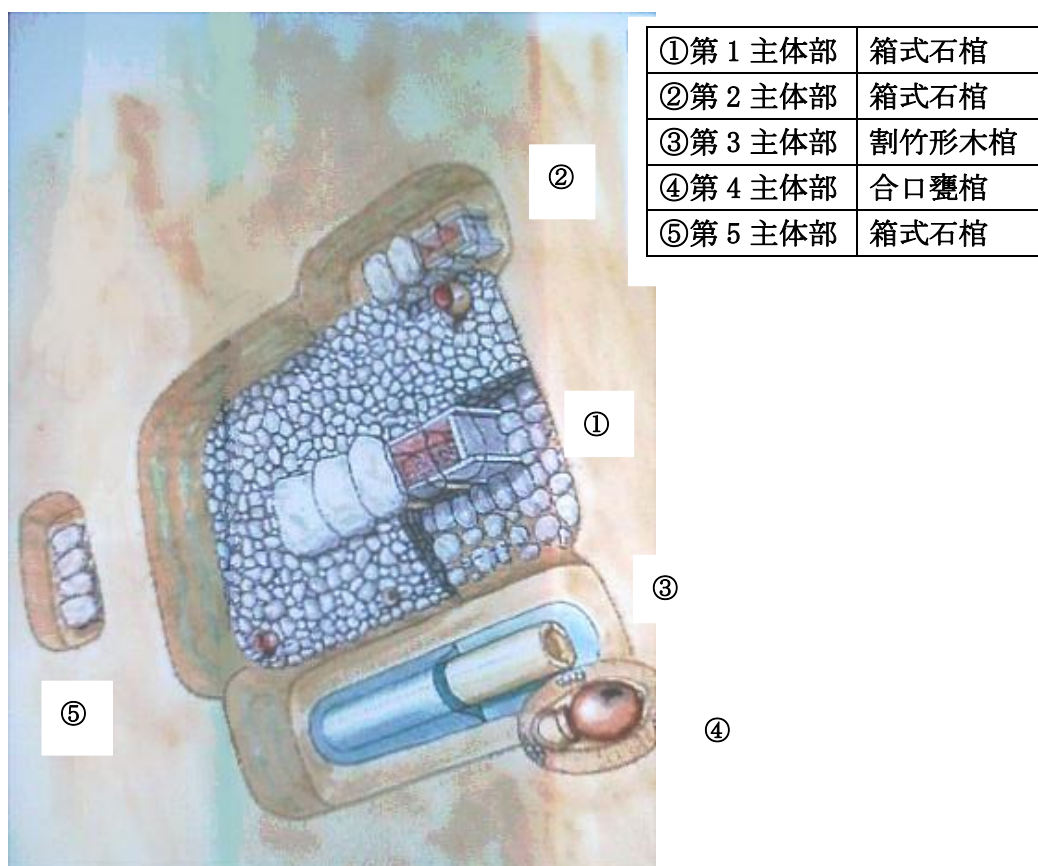
第2主体部は、第1主体部の北東側に地元産の石材を用いた小型の箱式石棺が築かれていた。石棺は昭和40年代には露出していたため、その後破壊されたとみられる。

第3主体部には割竹形木棺があり、第1主体部の南側で、棺の腐食によって陥没した溝状遺構と埋め土の上に土師器椀が置かれていた。

第4主体部はカメ棺で、第3主体部の東南角で出土した。この時期のカメ棺としては福岡県で最大級の大きさとする。

第5主体部はまた内部が赤色顔料のベンガラが塗布されていた箱式石棺で、第1主体部西側で確認された。

主体部は、第1から第4主体部が主軸を東西方向に整然と並べて築かれ、頭位は西に向けていたと推定される。これに対し、第5主体部は南北方向に主軸を向けて造られていることから、主体部の築造順位は第1、2、3、4、5という順に造られたとみられている。

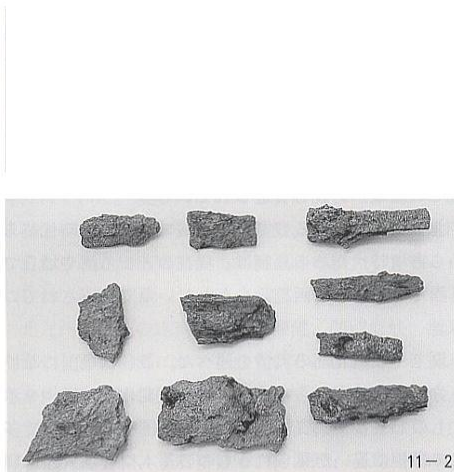




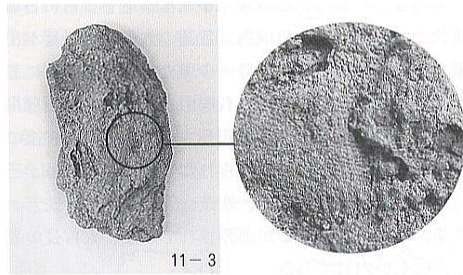
勾玉 (長さ1.9cm・2.8cm)・管玉 (長さ1.1cm)
古墳時代前期 宇美町大字坂本 光正寺古墳
宇美町教育委員会



変形獸首鏡 径10.6cm 弥生時代後期終末
柏屋町酒殿 酒殿遺跡2号石棺墓
九州大学考古学研究室

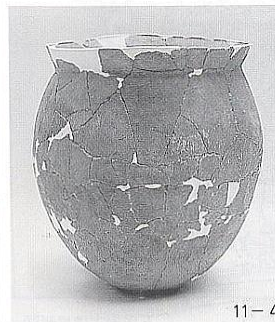


11-2



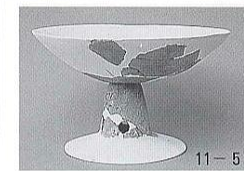
11-3

11-1 勾玉 (長さ1.9cm・2.8cm)・管玉 (長さ1.1cm)
11-2 鉄器 (鉄剣他)
11-3 繊維痕



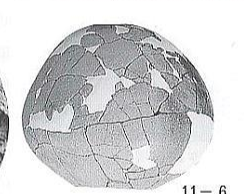
11-4

11-4
第1主体部土師器甕
口径32.2cm
器高40.5cm
胴部最大径37.5cm



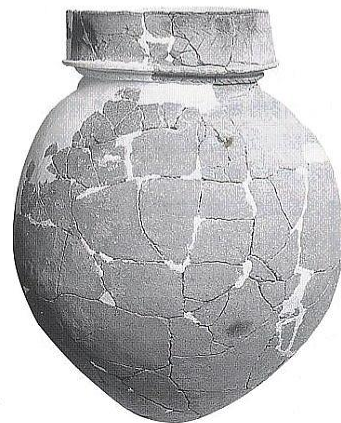
11-5

11-5 高杯
口径20.2cm (復元値)
残存高11.8cm



11-6

11-6
第4主体部上棺壺
残存高30.8cm
胴部最大径33.8cm



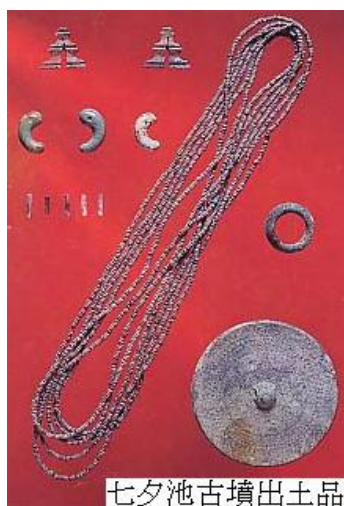
11-7

11-7
第4主体部下棺二重
口縁壺 口径44.9cm (復元値) 古墳時代前期
器高101.5cm 宇美町大字坂本
胴部最大径78.5cm (復元値) 宇美町教育委員会

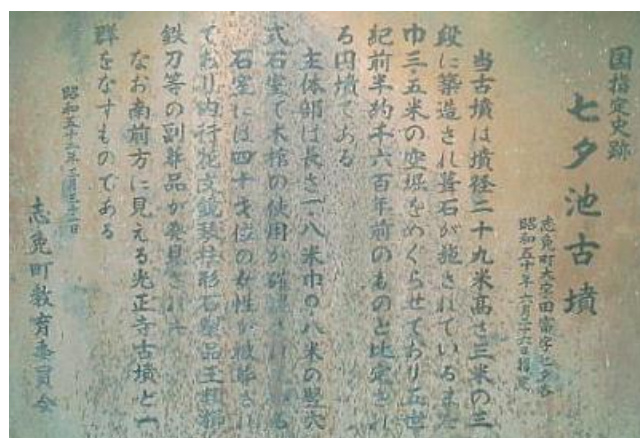
(2)七夕池古墳(糟屋郡志免町大字田富字七夕)

1973 年(昭和 48)、住宅地造成中に発見されたのを機に発掘調査が実施され、琴柱形石製品、刀、鏡、約 3,300 点の玉などが出土した。

- ① 円墳(直径 29 メートル)、高さ 3 メートル
- ② 三段築造、3.5 メートルの溝
- ③ 竪穴式石室
- ④ 木棺
- ⑤ 石室には 40 歳位の女性被葬
- ⑥ 内行花文鏡・琴柱形石製品・玉類・櫛・鉄刀



七夕池古墳出土品



里程論のまとめ

『魏志倭人伝』に戻ろう。

帯方郡の使者たちは、帯方郡から狗邪韓国・対馬・壹岐・末盧国・伊都国・奴国を経て、不弥国に到着した。

○『魏志倭人伝』

又一つの海を渡り、千余里にして末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜して居む。草木茂り盛えて、行くに前人（のかげも）見えず。魚・鰻を捕らうることを好み、水は深淺と無く、皆、沈没して之を取る。

東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚・柄渠觚と曰う。千余戸有り。世王有り。皆、女王国に統属す。（帯方郡の）郡使往来するとき、常に駐まる所なり。

東南して奴国に至る、百里なり。官を兕馬觚と曰い、副を卑奴母離と曰う。二万余戸有り。

東に行きて不弥国に至る、百里なり。官を多模と曰い、副を卑奴母離と曰う。千余家有り。

南して投馬国に至る。水行すること二十日なり。官を弥弥と曰い、副を弥弥那利と曰う、五万余戸可り。

南して邪馬壹国に至る。女王の都する所なり。

水行すること十日、陸行すること一月なり。官には伊支馬有り。次は弥馬升と曰い、次は弥馬獲支と曰い、次は奴佳梩と曰う。七万余戸可り。

(1)「里」で記された記事

①	帯方郡→狗邪韓国	7,000 里	⑤	末盧国→伊都国	500 里
②	狗邪韓国→対馬国	1,000 里	⑥	伊都国→奴国	100 里
③	対馬国→一支国	1,000 里	⑦	奴国→不弥国	100 里
④	一支国→末盧国	1,000 里			

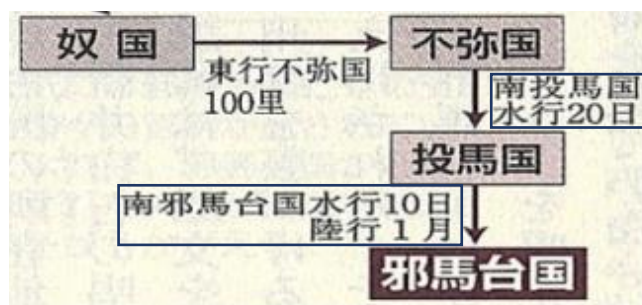
(2)「日数」で記された記事

- ①南水行 20 日で投馬国
- ②南水行 10 日、陸行 1 月で邪馬壹国

日本側は、すべて北部九州のクニグニである。

近畿のカケラもない。瀬戸内海・日本海方面とみられるクニグニもまったく登場しない。

ところが、『魏志倭人伝』は、里による距離をしめし、クニグニの特徴を紹介ながら、奴国から不弥国へ到達したところで、いきなり里による記述をやめ、方角と水行・陸行の日数によって投馬国と邪馬台国までの距離を説明しようとする。



上図のとおり、不弥国を起点にして、南へ水行 20 日で投馬国、投馬国からさらに水行 10 日、陸行 1 月進めば、邪馬台国は鹿児島を越えて、下手すれば九州の南海上にあったことになる。

これが、九州説の最大のネックとなった。

榎一雄氏の伊都国を起点とした放射説でも大差はない。

その後も、九州説においてはさまざまな案が提示され、珍説・奇説も入り乱れて、九州はバラバラというような印象すらあたえていることについては、すでに述べたとおりである。

一方で、近畿説においては何の根拠もなく、「南」を「東」に読み替えて、知らん顔をつづけていることについても、これまた述べたとおりである。

江戸時代の参勤交代でも、九州から一か月もあれば江戸に到着していた。「南」を「東」に読み替えても、「水行十日、陸行一月」が近畿の唯一性を証明しているわけではない。

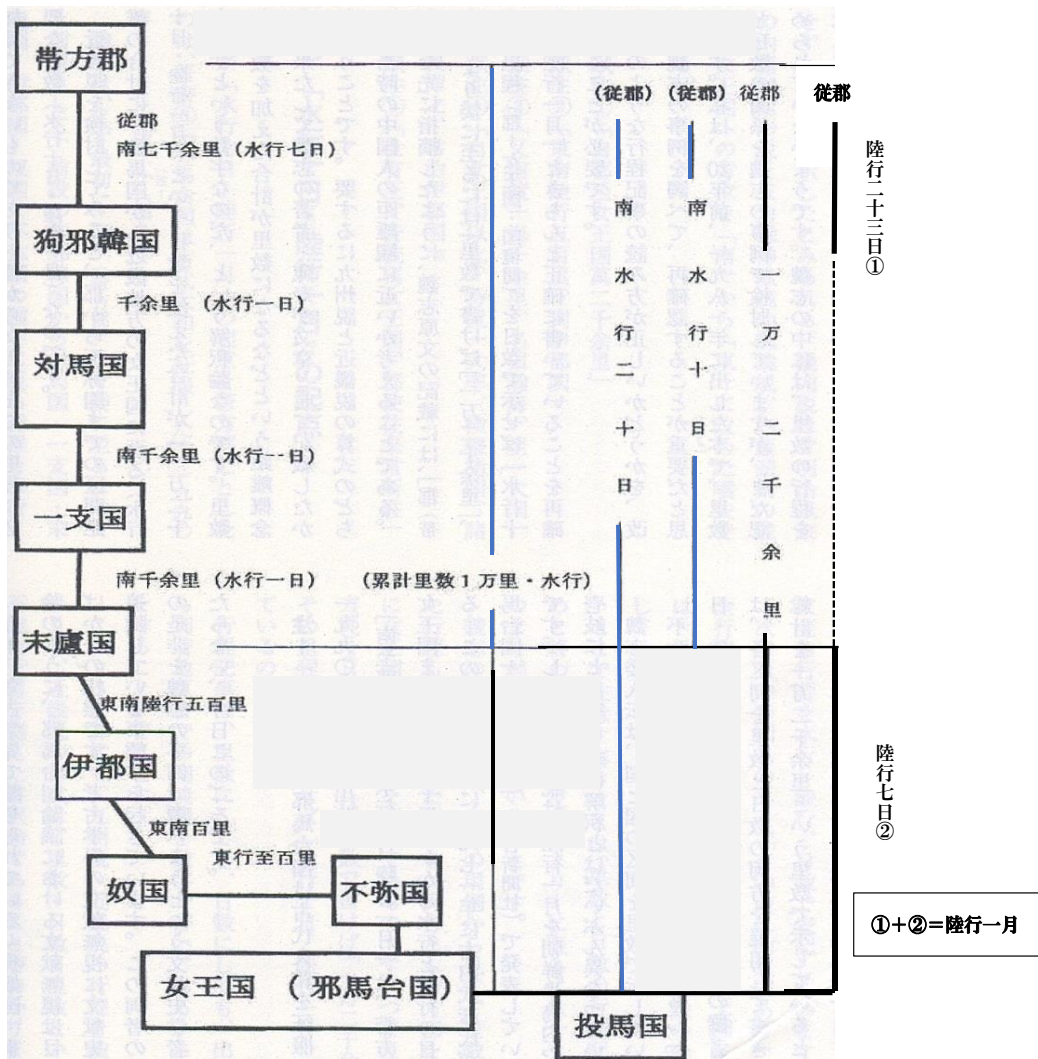
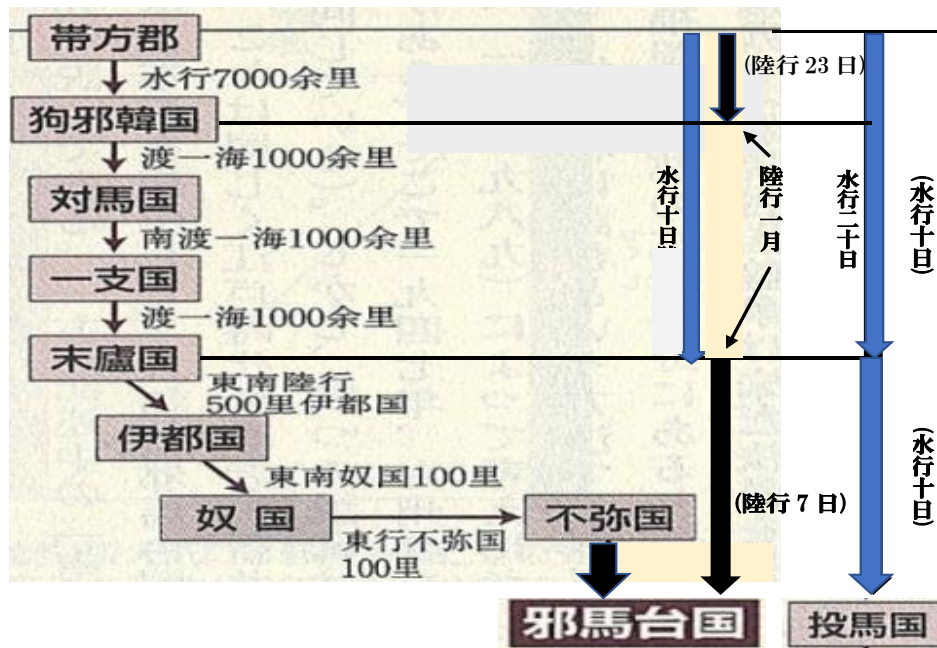
それはともかく、長年にわたり九州説(吉野ヶ里説)を主張された奥野正男氏が、水行十日、水行二十日いずれも、帯方郡を起点とし、陸行一月の起点は伊都国とされたことはすでに述べたとおりである。しかしながら、伊都国(糸島市)から吉野ヶ里(佐賀)へ行くのに一か月もかかるわけがない。

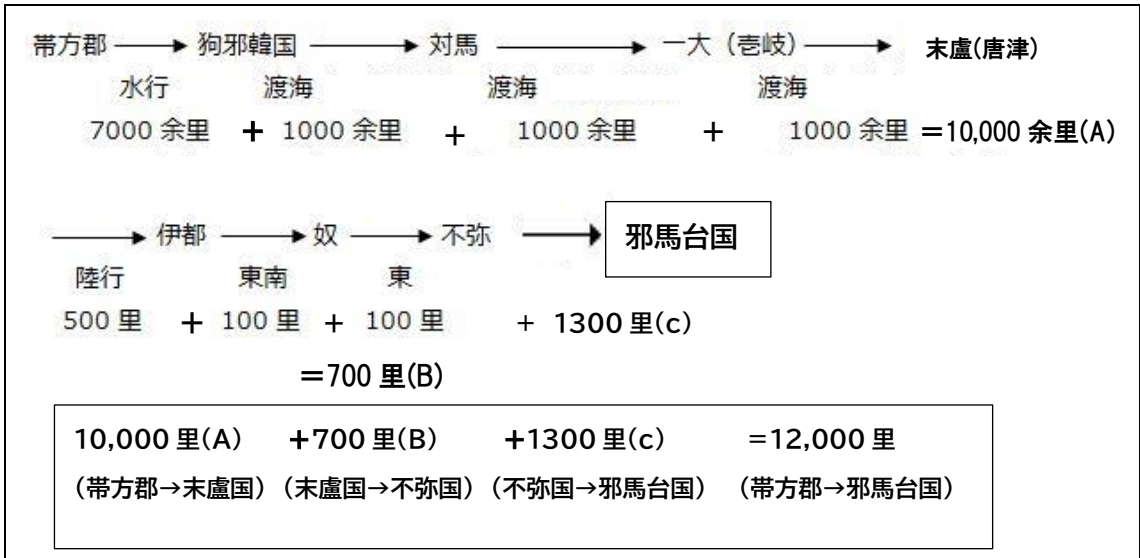
水行について帯方郡が起点であるならば、陸行についても帯方郡を起点にすべきではないのか。

帯方郡から邪馬台国まで 1 万 2,000 里、うち水行は帯方郡から末盧国までの 10,000 里で、全行程の 83 パーセントを占める。陸路については、1 万 2,000 里のうち、朝鮮半島の陸路が 7,000 里、九州の陸路は 2,000 里であるから合わせて 9,000 里で、全行程の 75 パーセントを占める。

陸行一月というのは、朝鮮半島と九州の陸路を合わせた日数ではないかということについても、すでに述べたとおりである。

	帯方郡	狗邪韓国	末盧国	伊都国	奴国	不弥国	到着地	所要日数
水行	→						邪馬台国	10 日
	→			→			投馬国	20 日
陸行	→		→				邪馬台国	1 月
	23 日		7 日					(30 日)





以上のことを踏まえて、やや推測を強めていけば、不弥国——宇美のすぐ近くで邪馬台国と国境を接しているということになる。

不弥国が邪馬台国と境界を接していたからこそ、『魏志倭人伝』は不弥国で里程記事を終了したのではないか。

その後、帯方郡を起点にした投馬国と邪馬台国への海路と陸路の日数を書き加えたが、どうしても書き加えたいのであれば、「自郡至女王国、万二千余里(帯方郡から女王国までは一万二千里)」という記事あたりに陳寿が置いておけば、後世これほど混乱することもなかったろう。

次の問題は、不弥国すなわち宇美までやってきた帯方郡の使者たちが、その後どちらの方向に向かったのかということである。最後の邪馬台国への道である。むろん、あとにつづく「水行陸行」の記事は無視して、不弥国から残り 1300 里(C)を歩いて、卑弥呼のいる邪馬台国の中心地へ向かう。

北に進み、宇美から宇美川を下れば博多湾と玄界灘に出る。しかしながら、わざわざ伊都国から回り道をして玄界灘に出る意味がない。

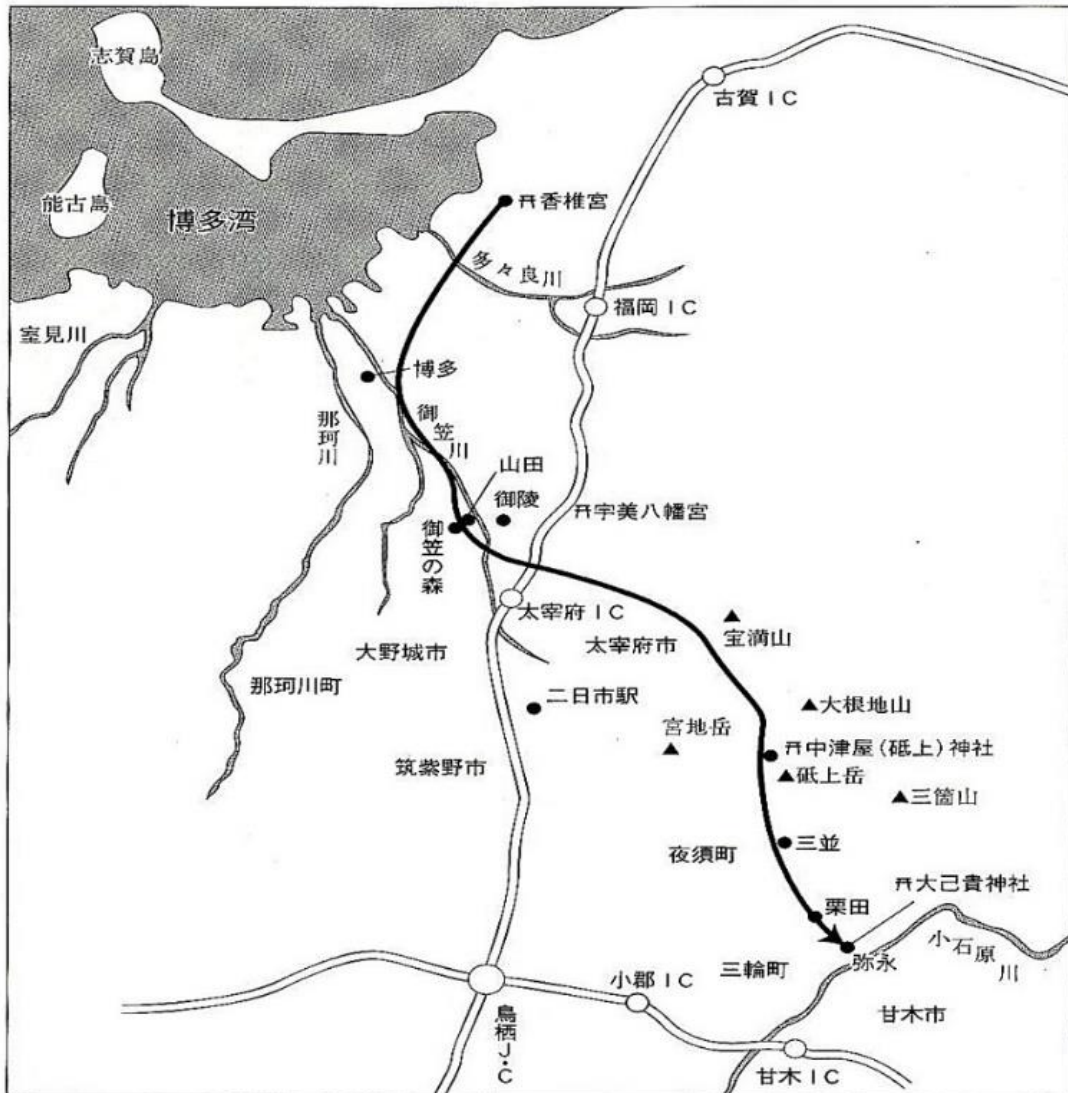
東に進めば、前述したように三郡山地にぶち当たる。険しい山道を越えて嘉穂地方に向かう必然性が見当たらない。

神功皇后の羽白熊鷲討伐コース

ふたたび、神功皇后伝承が参考になる。

『日本書紀』によれば、香椎宮(福岡市東区)を拠点としていた神功皇后は、仲哀天皇崩御後、朝鮮出兵の前に、朝倉方面(朝倉市)の羽白熊鷲という熊襲を討伐するため、みずから軍を率いて出兵した。その経路が次のとおりとなっている(河村哲夫『神功皇后の謎を解く』(原書房))。

宝満山の麓から夜須・朝倉郡方面に向かっている。



神功皇后は、博多あたりから御笠川をさかのぼり、大野城市の玉依媛の御陵と伝わる金隈丘陵と四王寺山を通して宝満山の竈門神社方面に向かい、宮地岳の北側から夜須郡・朝倉郡方面に抜けている。

四王寺山、宝満山、宮地岳などは御笠郡に属する。御笠郡は、大野城市(雑餉隈・栄町・錦町などを除く)・太宰府市・筑紫野市の領域である。

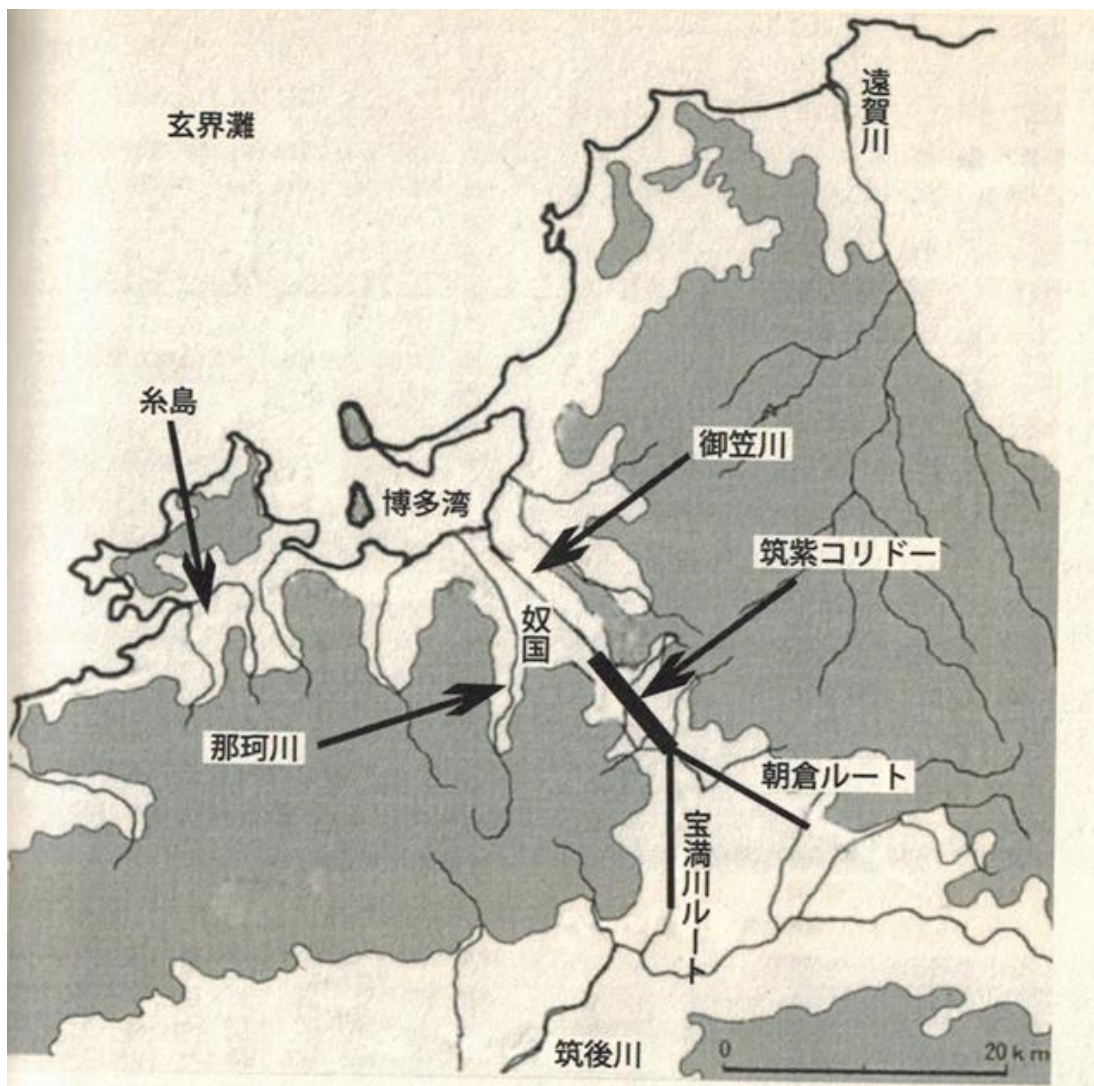
すでに述べたとおり、この御笠郡には大きな特徴がある。福岡平野と南側の筑紫平野を結ぶ平坦なルートが、地勢上この御笠郡にしか存在しないのである。筆者は、便宜上これを「筑紫コリドー(走廊)」と呼んでいる。水城(大野城市)から三国ヶ丘丘陵(小郡市)までの長さ約10キロ、幅2～3キロの区間である。

「筑紫コリドー」は、さらに太宰府市・筑紫野市・小郡市・鳥栖市を結ぶ「宝満川ルート」と、太宰府市・筑前町・朝倉市・日田市(豊後)を結ぶ「朝倉ルート」の二つに分岐する。

のちの時代、御笠郡に九州を統括する「大宰府」が置かれ、北からの侵入を防ぐために「水城」

がつくれ、「大野城」や「基肆城」などが築かれたのも、御笠郡のこのような地勢に基づく。御笠郡を遮断すれば、福岡平野と筑紫平野の南北の交通のほとんどを遮断することができる。

このようなことを、季刊「古代史ネット」第3号(2021年6月)の「北部九州のクニグニ」のなかで述べた。



ところが、福岡平野と筑紫平野を結ぶもう一本のコリドーがある。

「金隈→宇美→御笠郡(竈門神社・宮地岳)→夜須郡→朝倉郡→日田郡」というコースである。

便宜上、「宇美コリドー(走廊)」と呼ぼう。

帯方郡の使者たちは不弥国(宇美)までやってきた。宇美を通過したということは、彼らは「宇美コリドー」を通過して夜須郡から朝倉郡方面に向かった可能性が高いということになる。

筑紫平野のうち、基山や鳥栖などの佐賀平野方面に向かうのであれば、「筑紫コリドー」を使えばいい。御笠川沿いに水城方面から南下すればいい。福岡県側の小郡市・久留米市方面に向かう場合もおなじである。



A 宇美コリドー

B 筑紫コリドー



夜須郡・朝倉郡
A

以上からみても、帯方郡の使者たちが、佐賀県側の吉野ヶ里遺跡の方向ではなくて、東方の夜須郡・朝倉郡の方向に向けて進もうとしている意図がみえてくる。

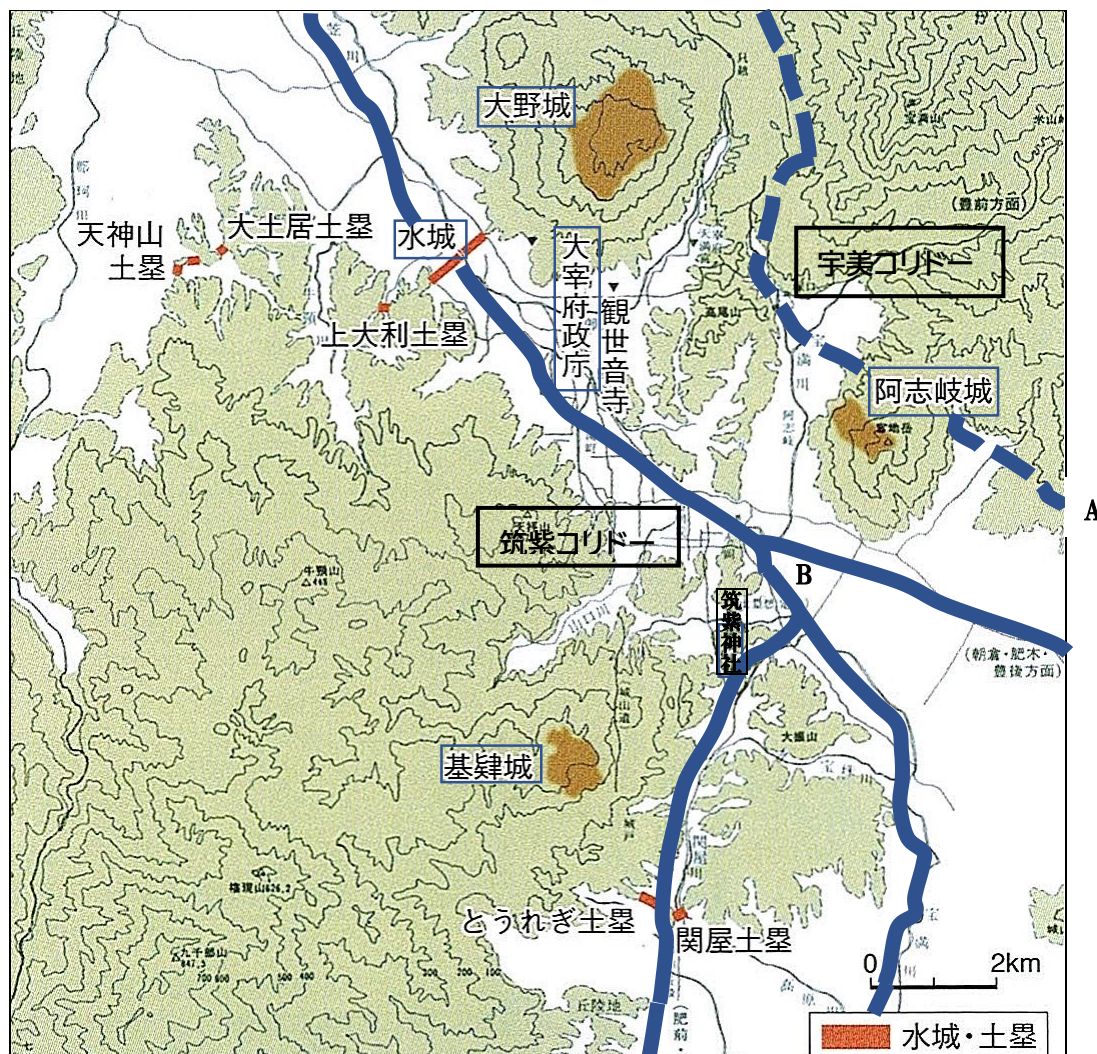
要衝の地としての御笠郡

さらにいえば、不弥国(宇美)——糟屋郡は、御笠郡と境界を接している。

そして、前述したようにその御笠郡が邪馬台国に属していたとしよう。すると、不弥国は邪馬台国と境界を接していたことになる。繰り返しになるが、それゆえにこそ、『魏志倭人伝』は不弥国までの里程記事でもって終了したのではないか——そう考えている。

そうであるとすれば、奴国の時代には奴国に属していた御笠郡が、邪馬台国の時代にはその要衝の地としての重要性から、邪馬台国の支配下に移っていたということになる。御笠郡——すなわち、「筑紫コリドー」を制する者は、福岡平野と筑紫平野を制することができる。

そして、大和朝廷時代になると、この地に大宰府が置かれ、「遠の朝廷(みかど)」として国の直轄地とされた。さらには、663年の「白村江の戦い」の後には、大野城、水城、基肄城、阿志岐城などが整備されたが、これまた御笠郡の戦略的要衝としての重要性に基づくものであることはいまでもなかろう。



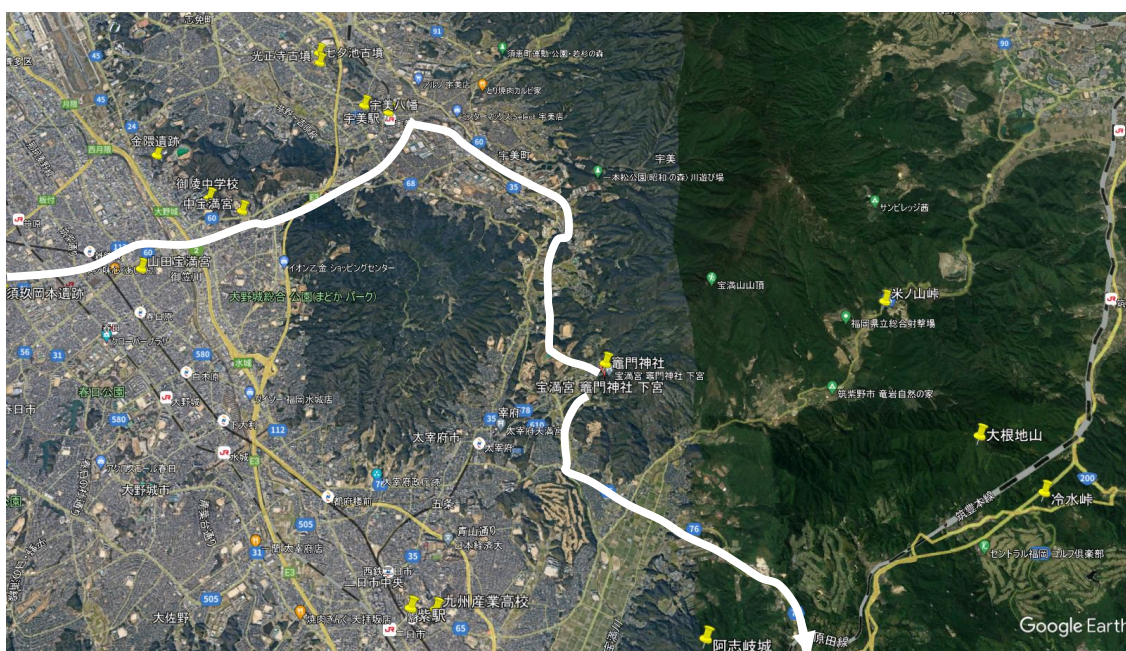
なお、御笠郡という名は、神功皇后伝承に由来する。

『日本書紀』には、「皇后が熊鷲を討とうと思って、樞日宮(香椎宮)から松峽宮(まつをのみや)に遷った。このときつむじ風がたちまち起こって、御笠が吹き落とされた。それゆえ、人々はその地を名づけて御笠といった」とある。

現在の宝満山は、もと御笠山といった。御笠山よりもさらに古い名は竈門山である。

神功皇后がその御笠を風に飛ばされた逸話に基づき、竈門山から御笠山に変えられた。竈門山の名残が、麓の竈門神社(太宰府市内山)である。

なお、御笠山はその後、玉依媛を祭る社(大野城市中)が天智天皇の詔勅により宝満宮(ほうまんぐう)と命名されたことにあやかり、宝満山という名に変わって現在に至っている。おなじく、宝満山を源に南方の筑後川に流れ込む川も宝満川に改称され、これまた現在に至っている。



しかしながら、残念なことに、御笠川と御笠郡および宝満川の旧名が忘れられてしまった。下表の[?]である。

筆者の勝手な推測にすぎないが、御笠郡には九州の一の宮ともいべき筑紫神社が祭られていることから、御笠郡は筑紫郡(国)、宝満川は筑紫川という旧名であった可能性が高いとも考えている。

旧名①	改称②	改称③	備考
竈門山	御笠山	宝満山	①竈門・山の姿がカマドに似ていたためか。 ②御笠・神功皇后伝承に基づく。 ③宝満・天智天皇の勅号に基づく。
?	御笠川		旧名は不明。下流では比恵川とも呼ばれた。
?	御笠郡		郡内に筑紫神社がある。もと筑紫郡(国)であった可能性あり。
?		宝満川	流域に筑紫神社がある。もと筑紫川であった可能性あり。

もし、御笠郡の旧名が、筑紫郡あるいは筑紫国、宝満川が筑紫川であったとすれば、事は重大である。

筑紫の起こりは、おそらくは筑紫神社(筑紫野市原田)付近であろうが、やがて筑前と筑後に拡大し、奈良時代には筑紫の島といえは九州全体をさすようになった。

まるで、邪馬台国の拡大の軌跡のようではないか。

このような筑紫と邪馬台国との関係のほか、筑紫と肥前との関係においても、次のような根本的な問題が存在している。

(一)そもそも何ゆえ筑紫平野が筑紫と肥前に分割されたのか。

(二)何ゆえ肥前と肥後は有明海をはさんで位置しているのか。

(三)肥前と筑紫の国境は、何ゆえ筑紫神社を起点にしたほぼ南北の直線で定められたのか。

(四)筑紫および脊振山南麓の肥前地方に広く分布する「荒ぶる神」伝承とは一体何か。

筆者としては、これらの問題はすべて『魏志倭人伝』に記された邪馬台国と狗奴国との対立の残影とみているが、今回のテーマから外れてしまうので、稿をあらためて詳しく述べたいと考えている。

吉野ヶ里遺跡

前述したように、帯方郡の使者たちは、倭人たちの道案内をうけながら、不弥国(宇美)から宝満山麓の竈門神社方面をめざしたであろう。竈門神社は宇美八幡の地から南約 6 キロの距離にある。ゆるやかな上りの道である。

邪馬台国の女王卑弥呼について、『魏志倭人伝』は、

「(卑弥呼は)鬼道につかえ、よく衆を惑わす。年すでに長大なれども夫婿無し。男弟ありて補佐して国を治めている。王となりてより、朝見する者は少なく、婢(ひ)千人を自ら侍らせる。ただ男子一人がいて、飲食を給し、辞を伝えて、(居所に)出入する。宮室・楼観・城柵をおごそかに設け、常に人ありて、兵器を持って守衛する」

と書いている。

宮室・楼観・城柵といえは、吉野ヶ里遺跡の風景が目に見えよう。



宮室



楼観(物見櫓)



城柵

『魏志倭人伝』は、伊都国は「女王国より以北」——つまり伊都国の南方に女王国(邪馬台国)があったと記している。

吉野ヶ里遺跡の位置は、伊都国——糸島の南方にある。



ただし、北墳丘墓の規模は南北40メートル、東西27メートルで、卑弥呼の墓の「径百余歩(140～150メートル)」とする『魏志倭人伝』の記事とは大きくかけ離れている。卑弥呼の墓は別場所につくったという説もあり得ようが、現時点ではそれを証明する墓も見つかっていない。

しかも、吉野ヶ里遺跡からは、ほかの候補地とも共通することであるが、「親魏倭王」の金印など卑弥呼と直接結びつけることのできる遺物や卑弥呼と特定できる文書なども出土していない。

現時点においては、「邪馬台国吉野ヶ里説」は成り立ち得ない説とみるべきであろう。

しかしながら、筑紫平野の一角を占める吉野ヶ里という大規模遺跡が、おなじ筑紫平野にあったとおもわれる邪馬台国と無関係であるはずがない。

これほどの大国が邪馬台国とどう関係にあったのか——この問題についても、いずれ稿をあらためて詳しく述べたいと考えている。

(以下、つづく)